

## 死滅回遊魚

### ■暖かい海の魚

今回の調査では、これまで蒲生干潟で観察したことのない魚類を目にすることができた。Fig.1は導流堤付近で観察したトゲチョウチョウウオの幼魚である。本来は茨城県以南のサンゴ礁などに生息するが、夏季に黒潮によって本州沿岸にあらわれる。低い水温に耐えることはできないため、冬を越すことはできない。このような回遊は死滅回遊と呼ばれ、2014年8月にはギンガメアジを観察している（レポートNo.74参照）。他にも、東北にも分布はしているが、数が少ないイシダイの幼魚（Fig.2）やハコフグの仲間も観察した。なお、トゲチョウチョウウオは神奈川県立生命の星・地球博物館の瀬能宏氏より同定いただいた。



(Fig.1 トゲチョウチョウウオの幼魚)



(Fig.2 イシダイの幼魚)

### ■地形の変化と生物の対応

レポートNo.125にあるように蒲生干潟では堆積が進んでいる。Fig.3は導流堤の基部であるが、砂が堆積している。Fig.4は8月6日の同所であるが、赤で囲んだ位置に杭が見える。Fig.5は今回調査時の杭で砂が堆積したことが明確にわかる。ただし、このように変化した場所にもすでにコメツキガニやゴカイの仲間（Fig.6）が生息しており（Fig.6）、新たに作られた環境への素早い生物の侵入を見ることができる。



(Fig.3 砂が堆積した導流堤基部)



(Fig.4 2016.8.6 Fig.3と同所)



(Fig.5 2016.10.15の杭)



(Fig.6 ゴカイの仲間の巣穴)